Max ROVIRA – マックス・ロヴィラ

マックス・ロヴィラはスペイン出身のカタロニア人画家で、南仏のコリウール（Collioure）で暮らし、制作しています。独学で学んだ彼の初期の作品は後期印象派に近いといえます。彼のスタイルは常に自由をよしとしているので、のちにキュービズムへと向かい、その影響は最近の彼のポップアートへの方向転換にあっても切り離しがたいものとなっています。

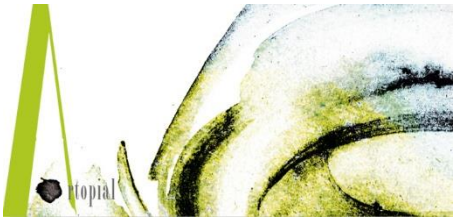
彼の絵画は控えめながらメランコリーを放ちますが、力強い線と並外れた色調の推移が用いられ、美の強さと輝かしい存在を存分に与えています。尽きることのない様々な反射光と陰影は見るものに強く訴え、視覚を捉え、移行していき作品の持つ瞑想を一新します。

あるときは熱く、あるときは冷たく、色調とキャンバスのワニスが激しい、力強い、引きつるようなリズムの中に私たちを引き込み、視覚の明るい調和はほとんど音楽的で地中海の光のように豊かです。

自身の独立性を重んじ、マックス・ロヴィラは私たちの予想だにしない独自のテーマを提示し、彼の方法で変形するのを好んでいます。彼のポップアートの肖像画は手加減することなく、意表をついたフラッシュのような（*flashing*）色彩を混合します。彼の生(活)のシーンは非常に構築され、イースター島の角ばった像に啓示を受けた幻想的人物を演出するのです。それら人物は彼の制作を実際にユニークなものにしており、数ある絵の中で、キャンバス上に乗せられた絵の具はまさに彼のものであるとわかるのです。

マックス・ロヴィラの絵画は主としてクロアゾニスム（cloisonnisme）画法を用いています。非常に特徴的なこの画法は、１８８６年にルイ・アンクタン（Luis Anquetin）に考案され、ステンドグラスの制作、日本の木版画（ジャポニズム）、エピナル版画や原始芸術から着想を得たものです。広く一様に塗られた色のゾーンと、一般的には　要素や人物を分割し囲むように輪郭を強調した黒で縁取るのが特徴です。夢を思わせ、ときおり幻覚に囚われたような世界の解釈を示すように、純粋で鮮やかな、強烈な色彩が現実の表象から作品を遠ざけます。

仮にモーリス・ドゥニ（Maurice Denis）、ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ（Vincent van Gogh）あるいはアンリ・ドゥ・トゥールーズ＝ロートレック（Henri de Toulouse-Lautrec）がそれぞれの作風で近いとすれば、クロアゾニスムは今日、漫画やアニメとは切り離すことのできない技法であり、マックス・ロヴィラの提示するポップアートにも完全に適応しています。

フランスや海外で紹介されたマックス・ロヴィラの作品がついに東京にやって来ます。その初めての展覧会にあたって、日本の歴史や文化にインスピレーションを受けた彼は、特別に未発表の絵画を実現しました。これらは『日本の美の感覚』（sens de la beauté japonaise）のフランス的な解釈として、ユニークかつ革新的であるハイブリッドな作品です。日本の皆さまにはいつもの視線やルールの枠を外してご覧いただければと思います。

東京での初の展覧会『セ・ラ・ヴィ！』の開催にあたり、アルトピアルはマックス・ロヴィラとその力強い作品に特別な場を設けました。彼の明らかな資質を信頼し、当社が日本で最初にこの確かな才能をご紹介する機会を得たことを誇らしく思っております。